
我が名はニャンコ

麻栗留音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が名はニャンコ

【Nコード】

N6861Y

【作者名】

麻栗留音

【あらすじ】

猫と遊びながら書いた、それだけの駄菓子。

我が名はニャンコ。

太古の古より神聖なる使徒として混沌の地上に在る。我々は高貴にして自然。自然にして高貴。

群れず媚びず染まらず、汝らの傍らに在り監視する宇宙意思。崇め祭れ、さらば与えん…。

今日は良い天気ニヤ。

お日様がサンサンとあったかほっこりな日射しをくれるニヤ。

アタシがこの家に来てからもう一年半くらい、このめったに使わない、野菜と調味料置き場になっちゃってる無駄に豪華なお客様用リビングの、無駄にアンティークなソファアールの上が木漏れ日のベッド。アタシはここが一番気に入ってるニヤ。ここでぬくぬくのお日様浴びながら寝まくるのが、日中の日課ニヤ。

アタシには消したくても消えないトラウマがあんニヤ。前の飼い主は、まだ産まれたてのアタシを寒空の下に捨てたニヤ。アタシ、何をどうして良いのかわかんなくて、お腹だけは減ってて、とにかく何か食べたくてトコトコトコトコ、冷たいアスファルトの上を歩き回った。ずっと、ずっとニヤ。途方も無くずっと、ずっと…。その内にアタシの上を、何か黒い、鋭い嘴の鳥が鬱陶しくまとわりつくようになったの。そいつらはアタシの小さな、汚れ切ったゴミクズみたいな体を、少し離れた場所からいつも狙ってた。漆黒の闇みために底知れない塊に、いつもギラギラ妖しく光る目。アタシは後ろが怖かった、いつもいつも後ろが怖くて、一歩歩く度に振り返っては、いつあの黒い塊がアタシに向かって嘴を突き立てて来るのか、それが怖くて正直、気がおかしくなりそうだったニヤ。アタシは凄

く怖い思いをしたニヤ。だから今でも誰にも体を触らせない。アタシを触っていいのは、この家で唯一アタシにカリカリとジューシーの2種類のご飯をくれて、アタシがご飯食べてるのを傍でずっと見ていてくれるお母さんだけニヤ。それ以外にアタシに触れてくる者は、無駄にアンティークなソファアをズタズタにしながら每晚手入れた、この研ぎ澄まされた爪が許さない。ニヤ。

毎日毎日、後ろから決して前に追いつかない恐怖が着いてきて、アタシは憔悴し切って、可哀想なくらい汚れて弱って、痩せていたニヤ。いつもお腹減って、何か食べれそうな物が落ちてる度にクンクンして。でもほとんど猫には食べれない物で、なんでアタシこんな惨めな身の上なのって、悔しくて鳴きたくなつた事たくさんあったニヤ。でも絶対鳴きたくなかった。アタシは今凄く惨めだけど、だから猫なで声でミヤオミヤオ鳴くのなんて、アタシのエベレストより高いプライドが絶対許さなかった。今アタシ、毎日夜の5時半になるとお腹が空くから、この家のお母さんに猫なで声で「飯食いてー」って、ミヤオンミヤオンってやってるけど、演技。本当のアタシは絶対に鳴かないよ、それはアタシがここから居なくなるまで変わらないニヤ。

アタシはこの家の、今はもう5、6年付き合ってる彼氏の所へ同棲しに出ちゃった若い女に拾われて、恐怖と空腹の毎日から抜け出す事ができた。痛い注射とか、神社に行って供養みたいな事されたり、色々めんどくさい事に付き合わされたりしたけど、トラウマになっちゃってる怖かった毎日から抜け出す事ができたから、結論は良かったって思ってるニヤ。あの若い女がアタシを拾わなかったらソファアでぬくぬくも、カリカリとジューシーの美味しいご飯食べる事も、この家のおじいちゃんが松ボツクリ投げるのをダッシュで追い回したりもできなかったし、仏壇破壊したり五月人形バラバラにしたり、障子切り裂いたり米ぶちまけたりとの刺激的な遊びを楽しむ余

裕もなかったニヤ。この家の男らは面白いニヤ。アタシが何かを破壊する度に「あー」だの「まいったなあ」だの途方に暮れて、あからさまにげんなりするから面白いニヤ。でもだからってアタシをぶったり、叩いたりしなくて、猫だからしょうがないって猫の事を理解してくれてるから、尊敬もしてるニヤ。見せないけど。美濃焼きの焼酎サーバーって、この家のお父さんが大事にしたオモチャを棚から落としてセラミックの破片にしちゃった時なんか、お父さん悄気まぐっちゃったけど、アタシの事ぶたなかったもん。毎晩酔っ払ってアタシに馴れ馴れしく触ってきて、その度に高速パンチと手入れされた爪で手を八つ裂きにしてやってるけど、アタシの事ぶたないから案外、嫌いじゃないニヤ。ウザいけど。

天涯孤独のアタシには仲間は居ないけど、仲間に近い存在かなって感じてるのはお母さんニヤ。お母さんだけにはアタシの中々に上質な毛を撫でさせてる。お母さんがアタシに一番優しいから、色々許して上げてる。同性だから気楽つてもあるかなニヤ。おじいちゃんはおかしいニヤ。いつも夜になると、どっから拾ってきた松ボツクリを廊下で投げてくれて、コロコロ転がってくカサカサの松ボツクリに、アタシの野生が呼び醒まされて、ダッシュで追いかけてやうニヤ。猫だから、動く物追い掛けちゃうのはしょうがないニヤ。アタシ肉食系女子だもん。おじいちゃんはお父シが廊下でリラックスして転がってる時とか、階段でブーツとしてる時とか、絶対声出してリアクションするからかわいいニヤ。アタシがコタツの中でぬくぬくしてる時とか、アタシの姿が見えないぞってリアクションを声に出してしてるから解りやすくてかわいいニヤ。あと、何げにアタシのタイプだったりする。アタシ職人気質に弱いニヤ。

アタシにとってそんな日常の、あの辛かった日々と比べたら本当に幸せで、温かい真心に満たされてるこの家。これ以上に何かを望んだら、アタシはきつとまた全てを失うんだろうなって、そんな怖さはいつも心の底に渦巻いてる。見せないけど。凄く怖い思いをする

と、急に物が動いたり、急に体を触られたりするとビクツてなっちゃう、悔しいけど。でもそれは猫も人間も同じだと思ってるニヤ。こんなに幸せな日々がアタシを包んでるのに、なんでニヤろう、窓から外を眺めちゃう。この家の窓は二重構造の頑丈なガラス、その厚いガラスの内から、あんなに怖い思いをした外の世界を、いつまでもいつまでも眺めちゃうニヤ。なんか小さい虫が飛んでたり、なんか知らない鳥がピーピー鳴いてたり、風で木の葉がガサガサ鳴ってたりすると、ガン見しながら目で追っちゃう。外の世界の色々な変化が面白くて、真剣になっちゃう。あそこに飛び付いたらどうなるのかニヤ、あれを追いかけ回したら凄く楽しそうだニヤ、そんな妄想で頭の中がいっぱいになって、真剣に目で追っちゃう。でもアタシ、わかってる。アタシみたいな性格の猫が外の世界に出て、きつと周りが見えなくなつて飛び出して、車に轢かれて死ぬニヤ。刺激が楽しくて、新鮮な変化が面白くて夢中になって、絶対何かに轢かれて死ぬニヤ。この家の中でだって、何度か尻尾踏まれたり、ダッシュして横切った時脚とニアミスして軽く蹴っ飛ばされたりするニヤ、自分の事は自分が一番わかってる。だからアタシ、夢中になつて眺めてるだけで良い。眺めてるだけで良いニヤ。

でもきつと、この家の人間がもし、この厚い窓ガラスを開けっ放しにしたら…、そうしたらアタシ、きつと好奇心を抑えられない。車に轢かれて死んじゃうってわかってても、アタシはきつと、外の世界に出てゆくニヤ。アタシの中のアタシを抑えられないよ、きつとだから気をつけて、アタシをよく見ていて、じゃないときつとアタシはこの家から居なくなるニヤ。優しくて温かくて馬鹿で面白くて愉快で、アタシに幸せをくれたこの家の人たち。アタシ実は、超大好きだし、凄く感謝してる、ちゃんとしてるよ。でもアタシは、居なくなると思う、外の世界とこの家の境界が無くなった、その一瞬の隙に。アタシは油断ならない猫ニヤ。だってアタシは猫。神聖な存在にして、神よりの使いニヤ。高貴にして自然、自然にして高貴

の、ハイソサエティ、ノール、詰まる所セレブな存在ニヤ。野良でも飼いでも、ペルシャでもマンチカンでもシヤムでも三毛でも、アタシらは神聖な存在。崇めるも祭るのも勝手にやれば良いニヤ、それで美味しい思いできるなら良いと思うニヤ、アタシみたいに捨てられた猫がそれで幸せを得るなら、祭りたてる人間を利用するくらい姑息な手を使ってアリと思うニヤ。猫はそれであって猫ニヤ、そして、外の世界はそうやってサバイバルしないと、常に全てを疑ってないと、黒い塊にすぐ啄まれる。甘くないニヤ、猫の世界も人間も。

ぬくぬくの日射しがちよつと暑くなって、アタシはブーツとする頭のままで体を起こす。無駄にアンティークなソファアが、日射しとアタシの体温で温くなって、アタシはひんやりした場所に向かってソファアの上から飛び降りる。着地したと思ったら、目の前にこの家の長男が偶然、起きてきた。そして目が合った。アタシは今、寝起きで頭の意識が半分、天空にすっ飛んでる。この男はそれを見抜く。そしてここぞとばかりに頭とか頬っぺたとかを手でムシヤムシヤ触ってくる。アタシは内心「触んニヤ」って思いながらも、フワフワする意識の中で少し気持ち良いとも感じるから、しばらくムシヤムシヤ触らせてやるのニヤ。そうしてるうちに結構気持ち良くなってきた、アタシはそのまま絨毯にコテンツて横になる。するとこの男は胡坐をかいて、しばらくムシヤムシヤ頭とか頬っぺたとか顎とか、触ってる。アタシはそのまま、ひんやりした場所に移動するのなんかすっかりどうでも良くなって、また寝る。これが猫ニヤ、すなわち神。

我が名はニヤンコ。

絶対生物にして時空生命体。我ら汝らの主にして全知全能、宇宙意思の代弁者にして創造主よりの使徒。我ら汝らに問う。摂理の中に在るか。我ら汝らに問う。在るべきままに在るか。

ミャオーン。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6861y/>

我が名はニャンコ

2011年11月20日20時04分発行